

### <研究ノート>地図を使ったフィールドワーク 教育実践(2) : 空想地図づくりのワーク ショップ

IMAIZUMI, Takayuki / UMEZAKI, Osamu / 今和泉, 隆行 / 梅  
崎, 修

---

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Lifelong Learning and Career Studies / 法政大  
学キャリアデザイン学部紀要

(巻 / Volume)

14

(開始ページ / Start Page)

201

(終了ページ / End Page)

226

(発行年 / Year)

2017-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013630>

# 地図を使ったフィールドワーク教育実践(2)

## — 空想地図づくりのワークショップ —

地理人 今和泉 隆行

法政大学キャリアデザイン学部 教授 梅崎 修

---

### 1 はじめに

本稿の目的は、大学における地図を使ったフィールドワーク実習方法を開発し、その実践を紹介・検討することである。2014年度に行われた教育実践に関しては、既に今和泉・梅崎（2016）で紹介したが、本稿は2015年度に行われた新しい試みの報告である。

なぜ、地図を使ったフィールドワーク実習が求められているのかについては、今和泉・梅崎（2016）でも述べたが、本稿から読み始める人も多いと思うので、繰り返しその目的を述べておきたい。以下では、今和泉・梅崎（2016）を引用しつつ、最新情報を追加した。

はじめに確認すべきは、このフィールドワーク教育実践の目的は、地図の読み方を一つのノウハウとして教えることではないということである。この教育実践は、地図を通して<社会>を考える方法を学ぶことを目的としている。

なお、フィールドワークに地図を使うこと自体は新しい試みではない。社会学や経営学などの社会科学分野、および民俗学や文化人類学などの人文科学分野において地域を対象としたフィールドワークを行う時に地図はよく使われる。特に地理学のフィールドワークでは、地図は必須の方法である。要するに、地図は、地形、生活、産業などの地域情報が表現されたものであり、その読解は地域を対象にしたフィールドワークにとって欠かすことができない道具かつ素材であると言える。

ところが、フィールドワーク教育では、参与観察や現場密着の聞き取りが学

生たちの関心を集める傾向があり、地図による事前の調査が疎かになるという教育上の課題があった。つまり、あまり準備をせずに調査地域に入ってしまう、地域の全体像が掴めていないので、結局地域を〈面〉としてではなく、〈点（取材先）〉として理解してしまうのである。特に大学外の短期滞在型の地域調査では、このような準備不足ではインタビュー調査が未消化になる。結局のところ、インターネットで取材先を探し、取材先で聞き取りを行っても、それは取材者である学生と取材先を点と点で繋げただけである。実際のインタビューを〈虫の目〉とするならば、地図の読解は〈鳥の目〉で地域を俯瞰することである。局所と全体の二つの目から地域を見る訓練がフィールドワーク教育には必要である。

フィールドワークにおいては、ただ正確に地図の情報を入手できるだけでなく、地図に描かれていない「社会」も地図の中から想像しながら読み解く必要がある。なお、大西・志村・田部・寺本（2005）は、大学生の地図好きと嫌いの発生要因を検討した上で、「生涯学習で地図や地図帳を活用するためのコンテンツはこれまであまり開発されておらず、このようなコンテンツの開発が今後、必要となるであろう」と記している。

社会認識における地図の意味を考察した松岡（2008,2016）は、地図と想像力を関連づけて「地理的想像力」の重要性を主張している。これらの研究は、若林幹夫（1995）『地図の想像力』が指摘した「地図は、個人が直接的に見晴らすことができない「社会」を全域的に可視化し、人々のあいだで伝達・共有される「社会的な」空間像」、そして厚東洋輔（1991）『社会認識と想像力』が指摘した「地図が社会認識の一つのモデル」という概念を引き継いで、「個人と社会を繋ぐメディア」としての地図に注目している。松岡（2008,2016）によれば、地図には、社会の要請に従って地図がつくられるという側面と地図が社会をつくるという側面があり、後者は社会学的な地図観である。そのうえで、個人・地図・社会の関係性を結び付ける能力概念として「地理的想像力」が重要であると指摘されている。グローバル化によって個人の取り巻く「社会」が大規模化・複雑化する中では、人々が「地理的想像力」を拡張し、「社会」を把握することが求められていること、さらにはコミュニティ再生が課題となっている「地域社会」再発見するために地図が役立つことが指摘され

ている。

しかし一方で松岡(2008,2016)では、情報メディアやgoogleマップなどweb上の検索システムの発展によって地図に詳しくリアルが求められるようになり、局所的なエリアの実用的な情報提供の追及が進められた結果、地理的想像力は縮小していることが危惧されている。すなわち、〈いま・ここ〉ばかりにフォーカスする断片的・自己中心的な地理認識ともに、想像力にもとづく面的な「社会」は不可視化されていく可能性がある。

以上のような地図をめぐる「地理的想像力」の現状認識を踏まえると、縮小していると思われる大学生たちの「地理的想像力」を再度拡張させながら、「社会」を面的に認識させる教育が求められていると言える。地図を読むとは、そこに描かれた人の営みや社会の仕組みを想像することであり、実際の訪問・聞き取りは、その想像された社会像を確認しつつ、時に違いを見つけ、再度、社会を想像しながら地図を読むという一連の相互的行為でなければならない。

このように「地理的想像力」を拡張することを目的とした場合、どのような方法があり得るであろうか。2014年に行われた地理ワークショップでは、地図という情報から様々な人々の生活や仕事(キャリア)を想像することで、「地理的想像力」の拡張を意図していた(今和泉・梅崎(2016))。つづく2015年に行われた地理ワークショップでは、空想地図の創作に取り組んだのである。

「空想」や「創造」を取り入れたフィールドワーク実習は少ないと考えられる。実証研究の方法としてのフィールドワークに拘れば、「空想」や「創造」に違和感を持つ人はいるかもしれない。しかし、「地理的想像力」の育成を考えれば、創作という行為が適当な訓練であろう。なぜなら、想像力≒創造力を育成するには、創造の楽しさや空想の面白さを刺激することが効果的と考えられるからである<sup>(1)</sup>。その効果について次節から説明したい。

なお、もともと地域フィールドワークの実習授業を行う大学は多いが、入学以前から地理的想像力が縮小しているために、その教育効果をあげられない授業も多いのではないか。この空想地図ワークショップの試行は、地域フィールドワーク教育の授業改善に取り組む人たちにとって意義があると考えている。

## 2 演習の概要

梅崎ゼミでは、地域を対象としたフィールドワークを学びつつ、地域マネジメントや地域経済について研究することを目的として2005年に開始された。2005-2014年は、市ヶ谷キャンパスの地元・神楽坂を調査対象にしていた。2006-2012年には、年1号の地域誌（第7号で休刊）を刊行し、その後2012-2013年にはインターネットサイト（しんじゅくノート）での神楽坂記事の作成を行った（梅崎・佐藤・笥（2014）と梅崎（2015）参照）。

しかし、長期間、同じ地域で地域調査を続けると、ゼミ運営にも限界が生まれた。ゼミの学生は入れ替わり、新ゼミ生が調査を始めても、既に先輩が調査を行っていることも多く、新ゼミ生にとって調査の難易度が徐々に上がっていったのである。そこで2013年度からは、地域に限定した調査ではなく、テーマを学年ごとの変える地域調査に変更した。具体的には、2013-2014年度は銭湯、2014-2015年度は団地、2016年度からショッピングモールと、ゼミ生が代わるごとに新テーマを設けた。ゼミ生たちは、そのテーマに基づいて東京近郊の調査に向かうことになった。

ところが、調査地域は拡大した結果、新たな課題も生まれた。以前のように大学地元限定していれば、調査を続ける中で地域の特性を自然に理解していくが、調査地域が拡大すれば、訪れた地域に対する事前知識が不足したままになる。特に多くの大学生は、生まれ育った地元や学校近辺という「点」として地域を経験しているだけである。

例えば、「なぜ23区だけに銭湯は集積しているか」、「50年代の団地、70年代の団地の違いは何か」、「商店街が元気な街とショッピングモールが中心の街の違いは何か」という問いに対して、具体的なイメージが自分自身の経験だけから取り出されるならば、限界がある。周囲数キロの日常経験以外のところに、どのような他者の日常があるのかを想像できないのならば、地域分析を行う土台を欠いていると言えよう。

もちろん、高度経済成長、都市化、過疎化、郊外化などのキーワードを都市・地域社会学、地域経済学、人文地理学などの教科書を通して学ぶことはできる。しかし、地元の日常以外の世界が自分の外にあるという想像力がなければ、知識は知識のまま、単なる暗記の対象でしかない。「地元と違って栄え

ている」、「ここにお金持ちが住んでいるようだ」、「高齢者が多い地域だ」というような想像力を伴う経験的観察があって、大げさに言うならば地域調査の事前仮説があってこそ地域調査の学びも深くなる。

特に、実際に大きな地方都市になると、訪問できる調査先は数カ所になってしまい、極端な例であるが、訪問先のまちづくりのNPOや地元商店や地元企業は理解できたとしても、中心市街地の場所、高齢化が進む旧市街地、再開発地域などを空間的に把握できなくなる危険性があった。それゆえ、学生たちには、地図を使った地域の面的把握を求めている。

ゼミのスケジュールは以下の通りである。ゼミは2年生9月から開始するが、地域調査の開始は2年生の12月の半日調査が最初である。それまでは、質的調査の講義や練習を行う。さらにテーマに合わせた基本文献の輪読を行う。また春休みには、全学年合同で1泊2日の東京近郊の地域調査を行う。街の全体像について地図などを見ながら想像し、半日かけてインタビューや観察を行い、次の日に調査報告を行う。さらに3年生になると本格的なテーマ別の調査を行い、3年末には地域調査の報告書を完成させる。途中夏休みは、地方都市への2泊3日の調査を行う。

今回のワークショップは、2015年10月21日に2-4年生を対象にしたものであるが、特に2年生に限定すれば、地域調査を開始する直前に地理的想像力を高めることを目的としていると言えよう。

### 3 ワークショップ

#### 3-1 目的

地図は、現存する地域の位置関係を見るための道具として使われることが多いが、その地域の成り立ちや変化を想像することは、研究者や趣味者に限られがちである。地域を調査する際、その地域の現状だけでなく、その現状をもたらした過去の経緯や他の地域との差異を見つけると、地域の理解はより深められる。こうした情報は、地域に関する数々の資料や関係者への聞き取りを通して得られるが、資料は膨大で、どこからどう調べるかの正解はなく、聞き取り調査も質問内容を練る必要がある。つまり、自身であらかた当たりをつけないと調査は先に進まない。

事前に「地理的想像力」があれば、実際に訪れる前に地図を見ただけでも、おおかたの地域の成り立ちや変化の推測がつく。こうした地理的想像力を養うべく、地図から地域の成り立ちを簡易的に再現、想像できる「空想地図ワークショップ」を開発した。架空の地域の地図を作りながら、地域の現状やそれまでの成り立ちを想像する、というのがこのワークショップの内容である。

### 3-2 用意するもの

実際に架空の地図を制作するのは、あまり容易ではない。一般的な地図は、測量や実地調査を踏まえて、とにかく現状をトレースすることで作られていくが、架空の地図ともなればトレースすべき「現状」がなく、測量や調査の方法は全く役に立たない。その代わり、ありそうな「現状」を再現していく想像力が求められる。これが今回狙っていた「地理的想像力」に繋がるものだと仮定できる。

しかし、実在する地域の地図を作った経験がない人に、架空の地図を作れ、というのはハードルが高いであろう。そのハードルは縮尺と描き方である。多くの人達は、身近に使っているあらゆる地物の距離や長さは、なかなか認識していないだろう。とっさに、マンション、小学校、駅のホーム等、身近に見ることの多い施設もどのくらいの面積比（大きさ）で描けばいいかはわかりにくい。また、描きたい風景や状態を思い浮かべることができても、それを地図で描くことは難しい。風景や地物を地図に置き換えるには、それだけで数時間では足りないトレーニングが必要になるが、今回の目的は「風景を地図で描く力を養う」ことではなく、これは地理的想像力をつける一つの過程にすぎない。

そこで、2つのアプローチを用意した。ひとつは、簡易的に風景を地図化する「空想地図シート」を使う方法（A Collage Style）である。ありがちな風景の地図パターンを4種類用意し、それを切り貼りして、架空の地図を完成させていく形である。もうひとつ、フリーハンドで手書きするための最低限のサポートを用意した（B Freehand Style）。参加者が共通して把握していると考えられる地域（開催地域付近の市街地）の地図や、あらかじめ身近な地物の大きさや距離をサンプルで示しておくのである。もちろんこの2つを併用してもよい。

次に示したのは、こちらが参加者に配布した説明資料（全4ページ）である。1ページ目で「あまり考えずに、紙の上で試行錯誤してみましよう。」と記したが、この意図は、想像力を事前に働かせ、計画的に都市を作るのではなく、偶然できた地域の風景に対して、何故そこがそうなったのか想像力を働かせ、その地域が今に至るまでの経緯や、その地域の周辺がどうなっているかを想像してもらうためである。都市がゼロから計画的に作られることは稀で、大抵は計画されず、偶発的に人が集まり、人が集まりすぎた場合は後天的に計画が敷かれて都市になる。地図シートは上から重ねて貼り直すことができるので、想像および描画のトライアンドエラーも容易である。



IMAGINARY MAPS MAKER

地理は、空想を導く。  
地理人  
研究所

# 地図の作り方

あまり考えずに、  
紙の上で試行錯誤してみましょう。

地図を簡単に描くために、  
縮尺と地図シートを用意しました。  
とはいえ、あまり考えずに、  
ランダムに線を引いたり、  
パーツを細かく切ったりして、  
組み合わせの試行錯誤をしてみてください。

半分くらいできたら、簡単に

- ・そのあたりの特徴・日常
- ・ここでのストーリー

を考えてみましょう。

線を引くと、道路や線路、川ができます。

線を組み合わせると、町ができてきます。

その町にはどんな人がいるのでしょうか。

その町の周りには何があって、どんな人がいるのでしょうか。

何気ない姿、何気ないストーリーも、

空想を拡げれば、たちまち空想の町ができていきます。

自分で描いた町、他の人の描いた町、

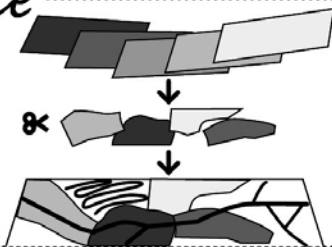
知らない町へのトリップを楽しむように、町を見ていきましょう！

## 選べる2通りの作りかた

### A Collage style

切って貼って  
組み合わせる

「突然地図描いてって言われても！」  
そうですね。わかります。  
そこで、市街地や住宅地、農地の模様の  
地図シートを用意しました。  
切って貼って、コラージュ地図を作りましょう。  
もちろん、その上から描いてもOKです。



### B Freehand style

手で  
描いてみる

手描きも、紙と鉛筆さえあればできます。  
いつも行く町の様子、空気感を、  
地図にするとどうなるか？  
縮尺とスケールさえおさえれば、  
案外簡単に地図は描けます。  
もちろん、その上に地図シートを貼ってもOKです。



IMAGINARY MAPS MAKER

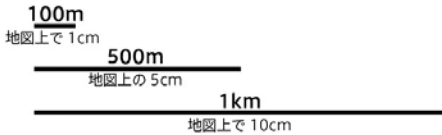
# 縮尺をつかもう。

ここでは、1万分の1の地図を描きます。  
縮尺とは…実際の何分の1か、計算で出ます。  
しかし、1万という数字も大きい上に、  
cm か km か…単位も変わります。  
ここではシンプルに、あなたの持つ感覚を、  
地図に置き換える、簡単な例を紹介します。

鳥居は、空を飛ぶ。  
**地理人  
研究所**

身近な感覚を地図で置き換えよう(1)

## 1万分の1の地図で、距離を表現する



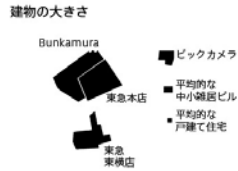
身近な感覚を地図で置き換えよう(2)

## 1kmの長さ、所要時間

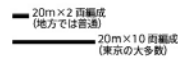


身近な感覚を地図で置き換えよう(3)

## 主要施設の大きさ

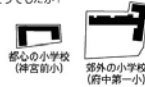


駅のホームは、電車の長さ+α。



### 小学校の大きさ

多くの小学校では、  
50m 走は直線で走れますが、  
100m 走はどうでしたか？



身近な感覚を地図で置き換えよう(4)

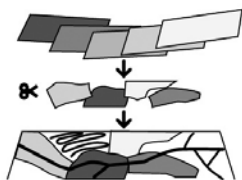
## 新宿駅/法政大学周辺の1万分の1地図



IMAGINARY MAPS MAKER

# A collage style

切って貼って  
組み合わせる



鳥居は、空気を集める。  
地理人  
研究所

## パターンを 組み合わせる。

代表的な、街のパターンの地図模様を用意しました。  
単なるコラージュとして、試行錯誤して  
切り＆貼りしていきましょう。



ビジネス街・工場



商業地域



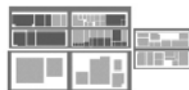
住宅地



農地等

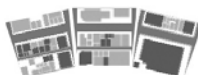
## 切り方、貼り方も いろいろ。

細かく切って組み合わせたほうが、リアリティは出ます。  
道路の部分で直線的に切る必要はありません。  
自由な形に切って、自由な組み合わせを試してみてください。



### 道路で直線的に切る

北海道の都市のように、  
格子状の街が出来上がります。



### 扇型に配置する

道路でない所で切って、  
ランダムに配置しても OK です。



### ランダムに切る

ハサミを使わずに破ってみると  
さらにランダムな曲線ができます。

なるべく細かく  
切り刻んで  
みましょう。

## その上から 自由に描いてみる。

コラージュした上から、白い紙を貼ったり、修正液、修正テープを使って  
自由に描くもよし、  
線テープで、道路や河川を引くもよし。自由にアレンジしてみましょう。  
シートには、鉄道や大通り（幹線道路）、公園は描かれていません。  
修正液や白い紙を貼って、線テープやペンで描き足していきましょう。



線テープ



フリーハンド

(フリーハンドスタイル参照)

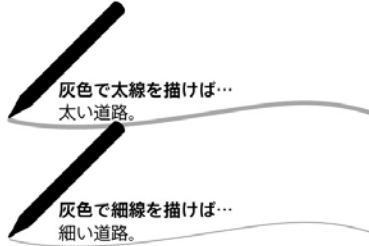
3

IMAGINARY MAPS MAKER

**B** *Freehand style*  
手で描いてみる



ペンで  
線を描く



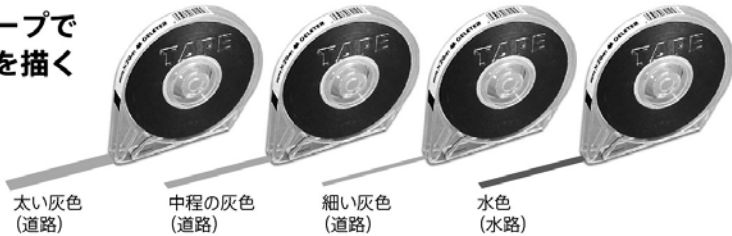
他にも・・・

水色で線を描けば...  
水路 (河川)

黒色で線を描けば...  
鉄道

・・・に見えます。

テープで  
線を描く



ペンで面を塗る

**Red** 赤色で面を塗れば...  
商業地域  
(賑わってる感じ)

**Yellow Green** 黄緑色で面を塗れば...  
緑地・山林  
(植物の連続性)

色紙で面を貼る

**Light blue** 水色で面を貼れば...  
河川・海  
(水全般)

**Yellow Green** 黄緑色で面を貼れば...  
緑地・山林  
(植物の連続性)

ペンで面を塗る



単純な線の組み合わせでも、ストーリーは生まれます。

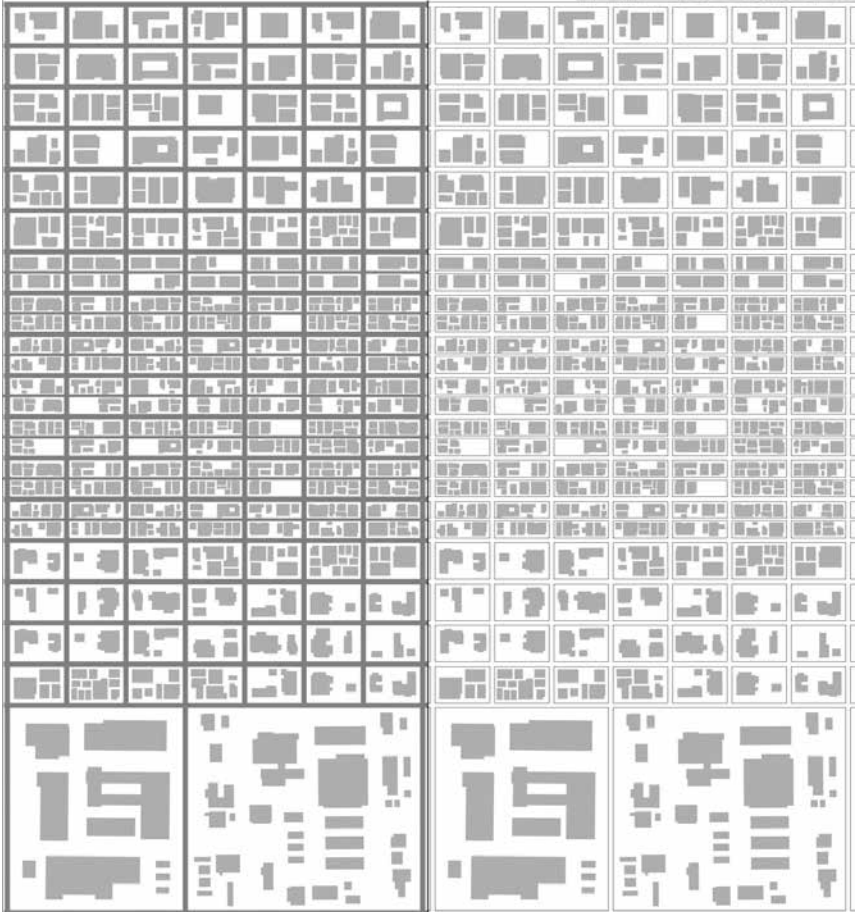
空想地図シートは4種類用意した(図参照)。以下では、それぞれの空想地図シートを説明する。

- ①ビジネス街・工場…これは事業所が集積したエリアである。ビジネス街でも、建物の大きさが大きく、周辺の道路幅が広いのは、大企業のオフィスが集積する大型のビルで、建物が小さく道路幅も少々狭くなるのは、中小企業のオフィスが密集するエリアである。また、大工場の敷地は広い。
- ②商業地域…市街地中心部の、商業施設が集中したエリアで、赤い色が商業施設である。
- ③住宅地…住宅が密集するエリアから空き地や農地が混ざり住宅が少ないエリアまで、区画整理されたエリアからそうでないエリアまで、さまざまなパターンを内包した。
- ④農地・山林…平地の農地から、傾斜地の山林まで、これも耕地整理したエリアからそうでないエリアまで、さまざまなパターンを内包した。

*collage style*

# 1 Business district Industrial Area

ビジネス街 (上)・工場 (下)



2015.10

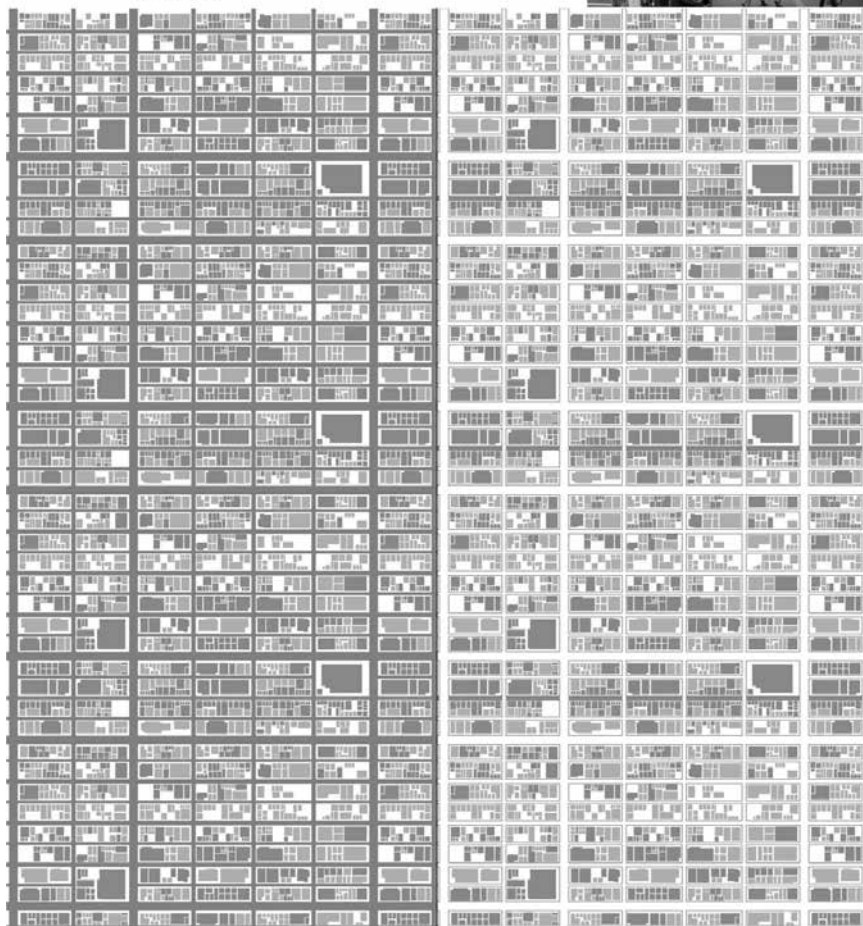
地理人  
研究所



*Collage style*

# 2 Commercial Area

商業地域



2015.10

掲載日: 2015年10月  
心理人  
研究所

*Collage style*

# 3 Residential Area

住宅地



2015.10

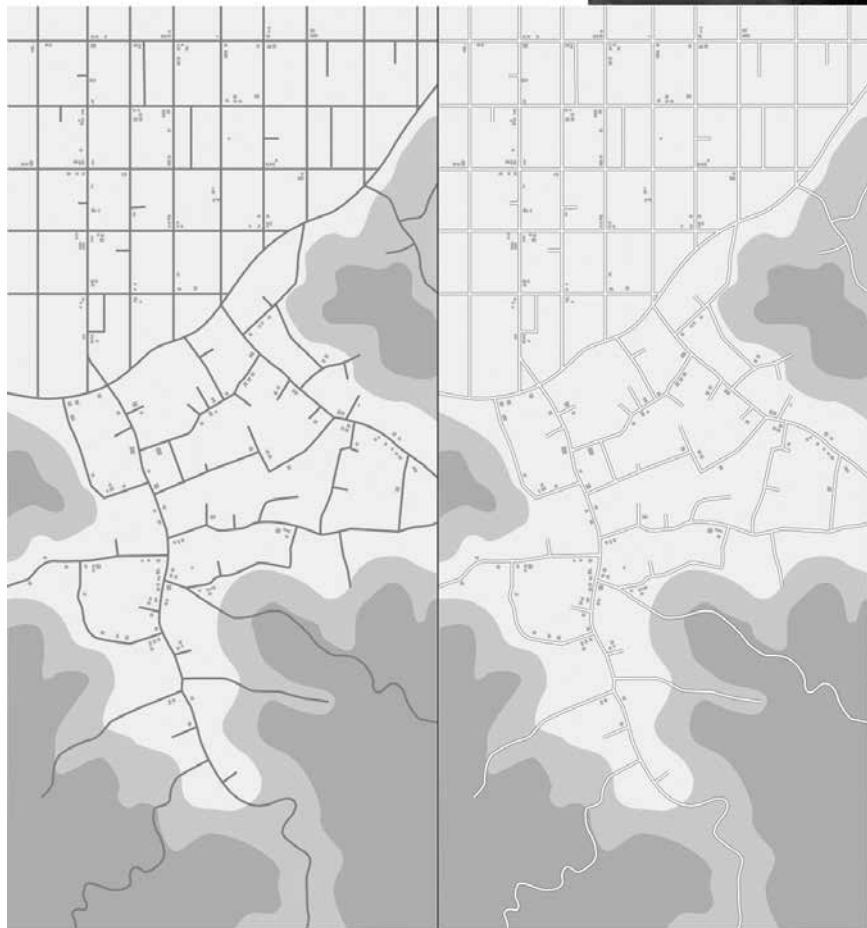
地図は、生活を導く。  
地理人  
研究所



*Collage style*

# 4 Farmland, Forest

農地・山林



農地・山林

地理人  
研究所

### 3-3 実施

主たるワークは、グループ作業ではなく全て個人作業としている（図1の写真は作業風景である）。もちろん、和気あいあいとおしゃべりをしながら行われる。最初の1時間半を制作時間とし、制作時間内も筆者が随時、「どんな人が住み、どんな人が集まるのか」、「どんな風景なのか」、「どうしてそうなったのか」、「その周辺の他の地域とどう違うか」の4点を尋ねて回り、参加者による想像を喚起していく。最後に30分でお互いが搜索した空想地図を共有し、参加者が作った空想地図に対し、本人の見解や意図を発表してもらう。その後、今和泉による空想地図の解釈が行われる。なお、この発表や解釈の内容は後述する。



図1

以下は、授業後に得られた感想である。いずれも「地図から現状を読み解く」ことが可能だという気づきや、今後、地図や実地の様子から、その地域の様子を多面的に見てみたい、という想像力喚起が生まれていた。

- ・今までぼんやりと地図を見るが多かったのですが、これからは「なぜそこにこの建物があるのか」という意味を考えながら地図を見るができると思います。
- ・「この道は昔ながらの道」とか、「この道は計画的にどういうねらいがあってつくられた」など考えたことがなかったので、地図の見方が変わった。というよりも地図を見る楽しさを知った。
- ・道を作るときに、ただつくるのではなくて理由があって作るんだということを知りました。普段何も考えずに歩いたり地図を見たりしているので、もっと想像しながら歩きたいなと思いました。
- ・普段、街にどういうふうに施設が密集しているか考えたことがなかったが、今回のワークショップでいつも利用している街を地図で改めて探索してみたいと思うようになりました。
- ・道路の形や周辺の建物の特徴から街の様子を知ることができました。
- ・地図からその土地の風土や住民気質まで分かるのはとても面白かったです。自分たちで作った地図にはロジックが成り立っていないな思いました。今現在、売られている地図のロジカルなところを見るのがおもしろそうだと思いました。
- ・普段、街にどういうふうに施設が密集しているか考えたことがなかったが、今回のワークショップでいつも利用している街を地図で改めて探索してみたいと思うようになりました。
- ・遊園地に行くのに道路がなかったとか、昔からの道路のあり方など、自分の中での反省点を見つけられてなるほどなと思いました。地図は想像して作ると自分の好きな町にカスタマイズできておもしろかったです。普段自分がどれだけ何も考えずに地図をみているかがわかりました。
- ・街を作っていく中でアンバランスなところが出てきたことが難しかったです。街は誰しも何気なくお店を使ったり通ったりしていますが、その土地

に建てた理由がそれぞれあるのだらうなと思うようになりました。

### 3-4 空想地図の解釈

ワークショップの参加者たちは、架空の都市の地図を作りながら、描きたい風景をどのように地図で描くか、そしてその風景をどのように他の風景と繋げていくか、といったことを試行錯誤する。その中でも、原風景を再現するパターンから、ありそうな現実を空想するパターン、あるいは現実性を飛び越えて全く架空のロジックを空想するパターンまである。そこで以下では、代表的な空想地図と今和泉の解釈を紹介したい。学生たちは、それらの解釈を聞きながら、空想にも現実的解釈が可能であることに驚いていた。

(1) 原風景を再現するパターン



図2 地図1

これは、大分県別府市出身の学生が作ったものである。本人にとって、山がそびえ立ち、山と反対側（描かれてはいないが、別府市においては山の反対側に海がある）に市街地が集中し、そのコントラストが描かれている。ただ、実際の別府を再現しようとしたのではない。本人は「普段からよく地図を見る方で、地図を見るのは好きですが、自分で街を作るのは初めてだったのでとても困りました。しかし、作りはじめると今までの土地の感じとかを思い出して作れたので、いろんな土地を振り返る良い機会になったと思います」とコメントしている。馴染みのある都市がどう構成されているのか、自身の中で再構築したと思われる。

## (2) ありがちな現実を再現するパターン



図3 地図2

この地図は、以前は農村だったが、鉄道開通を契機に人口が増加した様子が描かれている。鉄道は黒い太線で描かれて、駅は黒い長方形で描かれている。駅の周辺は商業集積が進み、住宅も密集しているが、駅から離れた地域はまだ建物がまばらである。これがこの地域の原風景だったのであろう。また、以前は地図の右側のほうが人口が多かったが、現在は左側のほうが多くなり、人口のバランスが変わってきていることも読み取れる。地図の左側は、駅の下側に広がる平野部の人口密度は低い、駅の上側の山沿いに大規模な集合住宅が建設され、新市街地が勃興している様子である。なお、この地図を作った学生は東久留米市、清瀬市出身である。この地域は、もともと農地が広がっていたが、首都圏の人口増によって鉄道沿線で大規模な宅地化が進んだ地域である。宅地化が大きく進行したのは約50年前なので、その過程を見てきた訳ではないが、今もまばらに残る農地や都市化の粗密を見て、農村の都市化は身近に日常として経験のストックがあったのかも知れない。

### (3) 特殊な現実を再現するパターン

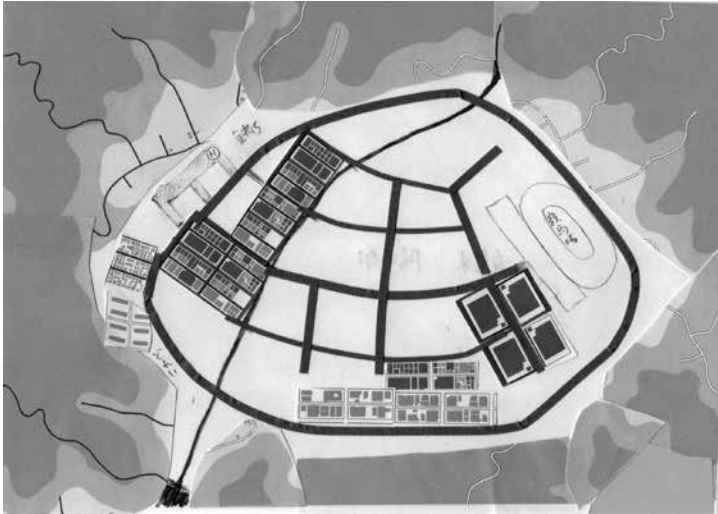


図4 地図3

山に囲まれた盆地に、太い道路や施設が配置されている。これは自然発生的にできたものではなく、何かしらの意図で計画的に配置されている。古くからの集落や農地の痕跡がなく、やわらかい曲線状の太い道路で囲まれ、住宅や事業所が配置されたニュータウンのようにも見える。太い道路の外側にあるのが、もともとの農地や細い道路であろう。作った学生は練馬区在住で、祖父母の家は八王子市だが、両市区とも、光が丘や八王子みなみ野といったニュータウンを持つことが無関係ではないのかも知れない。



## (4) ありそうにない現実を空想するパターン

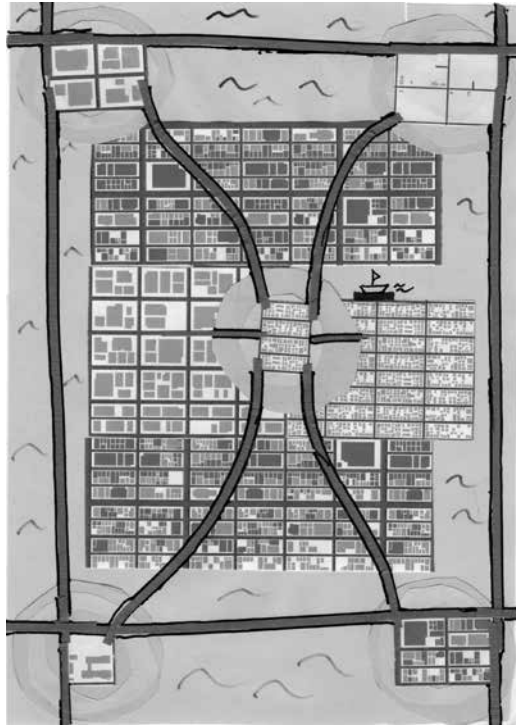


図5 地図4

こちらは海上の人工島と思われる架空の地域の地図である。このエリア外の八方に道路が伸び、人工島群はさらに拡がっていると思われる。また、陸地ができれば道路はその上を通すほうが建設費を抑えられ、島内のアクセス道路と兼ねられるため、なるべく橋は最小限になるが、島内に直接アクセスできない橋が多数建設されており、まさに橋の博覧会といった様相である。それでいて船のイラストがあり、船も発着するようである。このように空想に飛躍した地図の場合、こちらから「橋と島を隔離しないといけない合理性があるのか」、「はたまた橋の建設費用が陸上を通すより安いロジックがあるのか」、「島内アクセス以外の用途があるのか」という質問を投げかけた。これらの質問が、自分の想像を客観化する契機となった。



#### 4 おわりに

今回の空想地図ワークショップは、「空想」や「創作」という、一見すると客観的な実証手法とは異質な要素をフィールドワーク教育の中に取り入れる試みであった。地理的想像力の必要性を言うことは簡単だが、実際にそれを育成することは難しい。今回、今和泉が作成した空想地図創作の道具によって学生たちの創作の意欲が刺激され、結果的に「地理的想像力」が育てられたと考えられる。

さらに、空想地図ワークショップに対する学生たち感想を考察すると、自らの経験の想起していることが推察される。松岡（2008,2016）が危惧した「<いま・ここ>ばかりにフォーカスする断片的・自己中心的な地理認識」の外に出るためには、単に想像するのではなく、日常の経験を想起し、その経験の意味を内省することが求められている。

加えて、空想地図の創作後に、今和泉による解釈は、想像力の刺激とともに、空想した地図の現実性も考えること促していた。学生たちは、<現実的な空想>をするためにどうすればよいのかを考えた。これは、フィールドワークに欠かすことができない現実を具体的に想像（≒空想）することと同じである。

以上の空想地図ワークショップの学びの関係をまとめれば、図6のようになるだろう。このようなサイクルをワークショップの中で回転させることが求められている。

本報告では、空想地図ワークショップの方法を具体的に説明した。フィールドワーク教育に取り組む人達に向けて、役立つ情報があればうれしい。

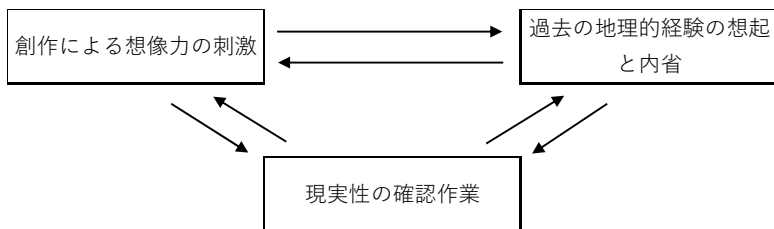


図6 「地理的想像力」育成の関係図

**[参考文献]**

- 今和泉隆行 (2013) 『みんなの空想地図』 白水社
- ・梅崎修 (2016) 「地図を使ったフィールドワーク教育実践 (1) - 想像地図散歩ワークショップ」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』 第13号 pp.143-156
- 梅崎修・佐藤憲・寛隆太 (2014) 「(事例報告) オーラルヒストリーによる地域メディアの可能性 - 大学生によるタウン誌作成の実践を通じて」『地域イノベーション』 第7号 pp.83-94.
- 梅崎修 (2015) 「オーラルヒストリーを用いた教育実践」『日本オーラルヒストリー研究』 第11号 pp.61-77.
- 大西宏治・志村喬・田部俊充・寺本潔 (2005) 「大学生の地図意識に見る地図好きと地図嫌いの発生要因」『地図』 43 (Supplement) pp.52-53.
- 松岡慧祐 (2008) 「個人と社会をつなぐ地図：現代社会における地理的想像力の可能性」『フォーラム現代社会学』 第7号 pp.100-113
- (2016) 『グーグルマップの社会学 ググられる地図の正体』 光文社新書
- 若林幹夫 (1995) 『地図の想像力』 河出文庫
- 厚東洋輔 (1991) 『社会認識と想像力』 ハーベスト社

**[注]**

- (1) 空想地図の楽しさを知りたい方に今和泉 (2013) を紹介する。

**ABSTRACT****Report of Fieldwork Education Using  
Maps (2)  
-An Imaginary Map Workshop**

Takayuki IMAIZUMI  
Osamu UMEZAKI

---

This paper introduces our second workshop on fieldwork using maps and conducts discussions regarding this in the university after first workshop introduced by Imaizumi & Umezaki (2016) . In fact, using maps for fieldwork is not a new attempt. However, some problems exist in using maps that students have not sufficiently investigated as they are only interested in participant observation and interview methods. Briefly, students would go into the field without much preparation, making it difficult for them to understand the essence of fieldwork. Therefore, we designed the workshop for building a strong “geographical imagination” and examined its effect.